

釣りに釣られて

高原英夫

第六回 「K君危うし！」

K君は、もともと麻雀は好きだし、カラオケはうまいし、大学は八年もかかって十二分すぎるくらいお勉強をしてから社会人になったヒトである。K君は私よりひとつ下だ。

彼が私の部下になった。どこか風来坊的な姿をみせたかと思うと、仁義の塊みたいになったり、はたまた、「徳川家康」を何遍も読み返しているといったことを聞くと、底の見えない人物に見えたりもするが、根は解るつもりではいる。

そんな時、飲んで釣りの話になった。魚がかかった瞬間の話をする、

「その時、魚の命のやりとりなんですな」

なんて、聞いた口をして応えられると、まあ事実そうなんだが、上つ滑りの受け応えに聞こえ、私になんとか話を合わせようとしていたことに間違いなかった。

でもそのうちに、本当に夏泊のある漁港に投げ釣りに行くことになった。

集合場所は、青森市の合浦町にあった釣り具店「ますへい」の前と決めた。もち

ろん休日なのだが、K君はどうも麻雀の約束があるらしかった。いまでこそ携帯電話があるから、集まらなかつたらそれはそれで電話を入れて確かめられるのだが、当時は、集合場所に来ないとすればもうほとんど手の打ちようがない。

「集合時間は午前四時で、『ますへい』前だけど、五分待っても来なかつたら行くからな」

何度となく繰り返し、当日の朝になった。私は少し早めに着いた。彼は寝ていないらしいのだが、ほとんど決めた時間には来てくれて、釣りに出かけた。ある意味で良い方に期待を外してくれた。

なぜ早く起きなければならぬのか。

どうせ釣りというお遊びなら、ゆっくりやればいいんじゃないか。

仕事上の上司だから、酒の肴につきあつたばかりに、と言わんばかりの彼の顔に、私は、やんわりと釣りの話を始めた。

つまり、会社の仕事じゃあるまいし、ましてや休日の個人の人間の寝起きの話である。朝ゆつくり起きて釣りで遊んで、時間になり帰って一杯やって寝る。自由に

やればいい、と彼は言いたいのだ。

魚は、いや人間を除く全部の動物は自然にいる場合、食事の時間は自然に支配されている。だから朝まずめといって、朝日が昇り始めた頃には魚たちの朝食が始まる。だからその時間には私達が海にいななければいけない。いたって簡単な道理なのだが、これを体でわかるまでには相当かかる。レジャーといえどもそれまでだが、針の向こうには生き物がいる。意志のある無しは私にはわからないが、ともかく経験上、まず朝日が昇るころには食い始める。だから、そこへエサを投げ込むのである。そうすると、徹夜だろうが、何だろうが、人間が自然を支配してとかではなく、あたり前のこととして、自然の時に自分の方で合わせていかなければならないことがわかるのだ。

だからといって、それがすべてではないのも、長い経験の上でわかってはいるが、イロハのイなのだ。

かくして彼とのその後何百回になったのか数え切れないほどの釣行が始まった。

投げ釣り、船釣り、溪流釣り、多種に及び、北へ向かう時には彼の車が私の家の前

に約束した五分前にはエンジンを響かす。西方面へ向かう時には私が迎えに行く。奥さんが必ず外に出てくる。家のヤツなど一度も起きたことさえないのだが……。

それは春から夏にかけての雨の日、溪流釣りの時のことだった。津軽半島のある溪流に出かけた。もちろん何年もあちこち歩いてよく知っている川の一本だ。海がすぐその、川の溜りにはよくアメマスがいることはとつくにわかっていた。

本当であればもつと山奥に車を置き、そこから登り始めて帰ってくる、その川では何度もこのパターンでやっている。でもこの日は雨で川の水が増していて、しかもいい溜りが思った通りに見えていた。護岸工事がされていて、土手からでは2メートルくらいあるが、降りるのは簡単だ。二人で川に降りた。そこで河口からふたつ、みつつめの溜りに、タマクラミミズをつけて流れの先から落とし、溜りの渦にまかせて一回転もしないうちに、雨で少し濁った中に黄金色に腹を光らせ、尾の縁が赤く見えるアメマスが見えた。一発目はかかりはしなかったが、二回目にはグンとかった。しばらく泳がせ、タモは溪流釣りでは持ち歩かないことにしているので、水面をみながら、背の川原をみながら、抜くというより引きずり上げた。四十センチ

千近い見事な型だった。しかも、またエサを流したら、もう一匹反応したのである。

「いる。いる。K君、やれよ」

私はすでにビクに納めたので、同じくらいのヤツがいるのがわかってる以上、彼に譲るのはあたり前だ。しかし、何度やつても結局かからず、上流を目指すことにした。一メートル位の魚道のある段差を何度か登り、川から一旦上がり、車に乗り上流を目指した。ただその川の中の途中、たまたま、太い丸太があり、段差に立てかけ、台のかわりにして登り、そのままにしておいた。

本格的に溪流釣りになると、雨は少し強くなり雨紋が幾重にもかさなり、上流からは葉っぱが流れ始めていた。雨の降り始めは、雨つぶが葉の上の虫を水面に叩き落とすのか、魚からみて、水面が乱れ人間とかの動きが見えなくなるのか、荒食いになる時がある。

極めつけは、まったくチョコレート色になった溪流に、中はとても歩けはしないが、その渦まいてる溜りだとか、支流からまだ濁らない水が流れこんだ所などにはイワナはうようよいる。二人はそれを知っている。何度も林道に接した所から竿

を出し、何匹か釣り上げては、すぐまた上流の接点まで行き、釣る。雨だし、車に乗るにも合羽は着たまま、せいぜいズボンをひざまで降ろし、シートを濡らさないようにしようとするが、釣りに気が入り過ぎていて車中が濡れようがまったく気にならない。

でもその日は、その溪流はずうつと奥に深い渓谷になっていて、そこまで入るともう身動きできなくなることは予想ができた。だからいつもよりかなり手前で早目に切り上げ、戻ることにした。

で、最初にやった場所にまた戻った。あそこに四十センチ近いやつがいるのである。

「ワ、ここもう一回やつて見る」

帰りしな、彼は土手づたいに降りてきつきの溜りにとりついた。私は川に降りず上で眺めていることにした。しかし、なかなかこない。

ところが、急に川が濁り出した。さつきまで川底が何とか見え、浅い深いがわかったのだが、あつという間にあたりはまつ茶色になっていた。しかも、ぐんぐん増水

していく。川の真ん中にいたK君は岸に向かいたいのだが底が見えず足の運びようがない。しかし、上からみていて、特に確信はなかったのだが、「こつち、こつち」と大声を立てて、ともかく川岸まではたどりついた。私はそこから彼を引き上げなければならぬ。ロープは無い。近くに木の枝があつたのでそれを拾い彼の手まで延べた。届いた。だが七十キロ近い彼を持ち上げれない。水はどんどん増していく。枝はすべり、K君は枝につかまるだけで足だけが壁を少しかけ上がるだけでそれつきりである。

頭の中は最悪のシナリオが頭をもたげ始めていた。あとやれることは何だ。

その時である、太い一メートル近い丸太が川の手前側を流れてくるのが見えた。

「K、あれをつかまえろ」

K君は必死になつてつかまえた。それを土手に立てかけた。踏み台になつた。上半身が上がりさえすれば後はなんなく引き上げられた。その流れてきた丸太こそさつき立てかけた丸太だつた。あの時、いつものように魚道を渡り登って行つてしまつていたら……。

ほんのわずかな行動が命の糸を繋げたのだと思った。ともかく、小さな溪流が深い谷の中を這っているのだから、あつという間に大きな濁った川にと化け、襲いかかる。それは自然にとつては特にどうだということでもあるまい。

車でひとまず、思いつ切り息をはき、無事を喜んだ。

わかっているようでもたかが人間の知識だ。命がけでやつても誰もほめてもくれない。好きなことはわかってくれるだろうが、誰もが言うだろう、「そこまでやらなくても」

だからだ。いぶ前から無理を重ねて、「絶対今日やる」などとはもう言うことはない。我々のような匹夫の蛮勇はそのまま死を意味する。

またやれる日は必ずやつてくる。それまでには魚もまた大きくなる。

そういえば、二人で山奥の魚道のない砂防ダムの上に立ち、下に竿を降ろし、釣り上げたらダムの上に放してやる。百匹近くはやつただろう。いまそのイワナたちはどうしているのだろう。上流で大きくなってくれているのだろうか。

平成23年2月